武藤禎夫編

噺本大系

第十三巻

東京堂出版刊

編者略歴

大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。朝日新聞社出版局勤務。出版校閲部次長、日本古典全書編集長を歴任。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（共編、筑摩書房）『軽口咄本集』（古典文庫）など。

噺本大系　第十三巻　定価七八〇〇円

昭和五四年六月二〇日　初版印刷
昭和五四年六月三〇日　初版発行

編者　武藤禎夫
発行者　岩出貞夫
印刷所　理想社印刷所
製本所　協和製本株式会社

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三―七（〒一〇一）
電話　東京　三二三―三七四一　振替　東京　三―二七〇

3393―354189―5164

© 1979 Sadao Mutō

凡例

第十三巻には、天明・寛政篇のⅡとして、寛政八年から十三年までに出刊された主要な噺本二十種を所収する。この時期は、安永年間に盛行した咄会本が、江戸・上方ともに復活して、優秀作が多く出板され、次代に登場する職業的咄家を生み出す素地ともなっているので、それらを中心に紹介した。

まず、書名と刊・序年、作・序者名、画家名、板元、書型、底本の所蔵文庫（架蔵本の場合は省略）などを記した。この場合、書名は、内題・序題・題簽などによって記し、刊記のないものは序の年月を示した。江戸以外の板元は地名を付し、相板のときは「〇〇等板」とした。また原本の体裁を知るため、本文巻頭をカットで示した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものにするよう努力した。その方針は概ね次の通りである。

1　本文の行移り・丁移りは、底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により、丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば、一丁の表と裏は（一オ）（一ウ）で示し、挿絵が続く場合は（一オ）（一ウ挿絵）、（一オ）（一ウ―二オ挿絵）などとした。底本に丁数を欠くときは、洋数字で実丁数を記した。

2　句読点は、底本にとらわれず、私見によって、句読点・並列点を施した。

3　小文字や割り書きは、人名とか評語、ト書きなど、意味のある場合のみ再現し、他は本文に組みこんだ。歌句は、理解しやすいように、改行した場合もある。

4　仮名について

イ　仮名の字体は、現行の平仮名・片仮名に統一した。「リ」「り」、「ヤ」「や」、「ツ」「つ」などは判別しにくいため、概ね平仮名にした。また「江」「子」は「え」「ね・ネ」とした。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は、読み易さを考え、そのまま残した。小文字の送り仮名は、概ね大きくした。

ロ　特殊な合字・連字は、現行の字体に改めた。（例、ゝ→シテ、ゟ→さま）

ハ　仮名遣いは混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣いには改めなかった。

ニ　本文の清濁は、底本では、当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。（例、おとがし→おどかし、こどく→ごとく）

ホ　誤字・誤刻と思われる仮名も改めず、行間に（ママ）（○○カ）と注記した。

ヘ　衍字と考えられるものも削らず、（ママ）（○○衍）と注記した。

ト　振り仮名も底本の通りとし、削除したり補わなかった。「限り」などの衍字もそのままとし、「空」などともした。ただし、位置のずれは正した。（例、奈良→奈良）

5　漢字について

イ　字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を使った。ただし、固有名詞などで、底本のままにした場合もある。

ロ　異体字は、できる限り、新字体または通行の旧字体に改めた。（例、枩→松、喜→喜、秋→秋、違→違、庵→庵、煮→煮）しかし、該当する字のない場合（例、姥、泪、姫）は、そのまま残した。

ハ　宛字及び通行の久しい文字は、注記せずに残した。（例、百性—百姓、有時—或時、内陳—内陣）ただし、極端なものは（ママ）とか、正しい字を（　）内に注記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ニ　特殊な草体・略体は、通行の文字に改めた。（例、ゟ→候、ゝ→也、ヒ→被、ゟ→給、ト→部、井→菩薩、厂→雁、厂→磨・摩）

ホ　誤字・誤刻と思われるものはそのままとし、注記を施した。

6　反復記号は、底本にしたがい、「〻」「ゝ」「〻」「〳〵」の四種を使用した。

7　挿絵はすべて収録した。その位置は、該当する咄の中か、近い場所に挿入し、原本での丁数も明記した。後人のいたずら書きなどは消したが、他は修整を加えなかった。なお、挿絵やカット用の本文巻頭写真で、原本には匡郭のないものもあるが、体裁上、枠で囲った。

8　序文中の印や、奥付・刊記などは、できる限り、原形を示した。ただし本巻所収『雅興春の行衛』の欄外の註記などは、本文の該当個所に、括弧内に小文字で組み入れた。

9　底本の虫損・汚損などで判読できぬ個所は、同一板本で補えた場合は特に注記をせず、推定しうる場合は（○○カ）と注記し、全く不詳のものは、空白のままとした。

10　題名のない場合は、一行空きとして仮題は付さなかった。全篇無題の書は、検索の便を考え、各話の冒頭にそれぞれ洋数字で、通し番号を付した。

11　謡の詞章に付したゴマ点や、特殊な囲みなどは削除した。文中の特別な図柄は、凸版で示した。

12　諸本などで、話の異同や出入のため特記を要するものは、補遺の形で、巻末の「所収書目解題」に付加した場合がある。

13　噺本に多く見られる嗣足改題再板本は、出来る限り元板を紹介した。両者の関連は、大凡解題で触れたが、主要なものは、第十九巻末の「嗣足改題本」の項に一括して収めた。

14　第十六巻までは、刊行の年代順に収録し、絵入りや特殊な噺本を第十七巻以降に特集した。なお、絵入りの丁が主体であるが、文字の丁も加わった本巻所収『太郎花』などは、通常に収めた。

15　各巻末に「所収書目解題」を付した。そこでは、簡単な書誌と、諸本の異同や嗣足改題再板本との関連などを略記するにとどめた。

16　できる限り完本の紹介を心がけたが、一部が落丁や汚損の不備なものも、未翻刻で内容のよいものは、敢えて所収した場合もある。

底本に使用した原本は、主として公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものであるが、一部は架蔵本も用いた。完本を求め得ず、二、三の本を併せ用いた場合もあるが、その一々は記さなかった。

第十三巻で、原本の閲覧と公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して深く謝意を表する。

東京大学国語研究室・同国文研究室・国立国会図書館

噺本大系　第一期全八巻　（既刊）

*第一巻　寒川入道筆記　戯言養気集　昨日は今日の物語　わらいくさ　百物語

*第二巻　醒睡笑　理屈物語

*第三巻　一休咄　一休関東咄　狂歌咄　かなめいし　竹斎はなし　一休諸国物語

*第四巻　秋の夜の友　囃物語　杉楊子　新竹斎　籠耳　二休咄　諸国落首咄

*第五巻　宇喜蔵主古今咄揃　当世軽口咄揃　当世手打笑　当世口まね笑　野鹿武左衛門口伝咄　鹿の巻筆　正直咄大鑑　当世はなしの本

*第六巻　枝珊瑚珠　露がはなし　遊小僧　初音草噺大鑑　露新軽口はなし　露の五郎兵衛新はなし　軽口御前男　軽口ひやう金房

*第七巻　軽口あられ酒　露休置土産　軽口星鉄炮　軽口福蔵主　軽口出宝台　軽口はなしとり　軽口機嫌袋　座狂はなし　咲顔福の門　軽口独機嫌　軽口蓬莱山　水打花　軽口もらいゑくぼ

*第八巻　軽口初売買　軽口福おかし　軽口春ふくろ　軽口耳過宝　軽口わかえびす　軽口臍順礼　軽口瓢金苗　軽口笑布袋　軽口浮瓢箪　軽口腹太鼓　軽口福徳利　軽口豊年遊　口合恵宝袋　軽口東方朔　軽口扇の的　軽口はるの山　軽口片頬笑

平均三二〇頁

定価　各巻六八〇〇円

目次

凡例 三
喜美談語（寛政八年正月刊）……三
噺手本忠臣蔵（寛政八年正月刊）……二四
雅興春の行衛（寛政八年三月刊）……三三
詞葉の花（寛政九年正月刊）……五九
臍が茶（寛政九年正月刊）……八一
巳入吉原井の種（寛政九年正月刊）……一二三
庚申講（寛政九年初冬刊）……一一九
新話違なし（寛政九年霜月刊）……一五〇
無事志有意（寛政十年正月跋）……一七三
鶴の毛衣（寛政十年正月序）……二〇一
新玉箒（寛政十年四月序）……二〇七
新製欣〻雅話（寛政十一年正月刊）……二三〇

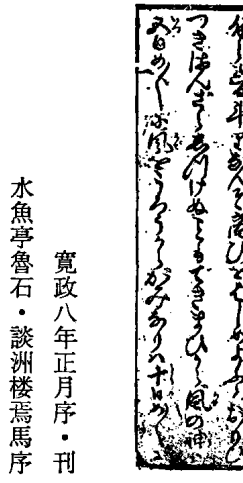
意戲常談（寛政十一年正月序）……二五四
塩梅余史（寛政十一年正月序）……二六一
腮の掛金（寛政十一年正月跋）……二七二
虎智のはたけ（寛政十二年正月刊）……二八二
曲雑話（寛政十二年九月刊）……二九〇
馬鹿大林（寛政十三年正月刊）……三二三
滑稽好（寛政十三年正月刊）……三二七
太郎花（寛政頃刊）……三三七
所収書目解題　三四九

嘶本大系

第十三卷〈天明・寛政篇Ⅱ〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

喜美談語〔序題〕



寛政八年正月序・刊
水魚亭魯石・談洲楼焉馬序
美満寿連作
宗理画
上総屋利兵衛等板
中本一冊

○落はなしもく録

○雷神門　万羅作　○七両二分　竹里作
○七段目　巴人亭〻　○しかた咄　談洲楼〻
○三人生酔　狂歌堂〻　○からす猫　日頂庵〻
○天狗　有芳舎〻　○はつ雪　白鯉館〻
○なぞ〳〵　寛之〻　○三枚洲　吾友軒〻
○不しん紙　談洲楼〻　○子がへり　淮南堂〻
○六あミだ　振鷺亭〻　○雷見舞　船づミ〻
○学文　水魚亭〻　○五段目　先裏住〻
○勧化　だんじう楼〻　○お星さま　長雄〻
○まじない　香東〻　○二階ずまい　停〻〻
○すべり道　つら丸〻　○てうちんの大サ五十三次〻
○女郎のぼせ　菊人〻　○かけ取　五十三次〻

（目一オ）（目一ウ―目二オ挿絵）

○どら息子　有芳舎作　○がくしや　貢作
○鱣のすじ　白鯉館〻　○雷　竹里〻
○酒　ミつき〻　○七福神　美知丸〻
○ぼうとる円　玄黄〻　○開帳　竹里〻
○ぶせうな供　紫江〻　○相撲見物　てい〳〵〻

○がく者　菊人丶　○七夕　五十三次丶
○堀井戸　竹里丶　○雷ばなし　百人丶
○かみなり咄　紫江丶　○多田薬師　玉嵩舎丶
○大鵬　鳰下道丶　○年の市　磯名丶
○うぬ惚　蓬雨丶　○たうなす　雛丸丶
○親こゝろ　未青丶　○水茶屋　星衣丶
○平家物語　有正丶　○たゝき牛房　文馬丶
○女郎買　恋川好町丶　○素人医者　談洲楼丶

（目一ウ―目二オ）

（目二ウ）

喜美談語叙

宇治拾遺物語ハ大納言隆国卿、さつきより八月まで、平等院一切経蔵の山ぎわ南泉房にこもりたまひ、往来のもの、高きいやしきをいはず語るにしたがひ、大きなる帥帋にかゝれけり。たふとき事も有、哀成事も有、少〻ハそら物語も有、りこう成事もありとかや。これ咄の問屋にして、竹取物語ハ桃太郎の本店、万葉の浦嶌がことハ乙姫の元祖なるべし。こゝに談洲楼大人、（一オ）戯談のむしろをひらき、卯月半より文月のすゑまでまきおさめ、集吟の噺その数五百あまり八十におよぶ。かの宴につとひ来る人〻のおかしとあるを聞、はたふるきを捨、あたらしきを拾ひ、禁句遠慮あるハ引墨におよはず、秀逸七点以上をさくら木にあらハし、先初篇一冊を出し、猶も巻をわかちて春深きながめとす。嗚呼此はなしの世に流行せんこと、西ハ九州長崎から赤飯、ひがしハ奥州白石ばなし、（一ウ）遠からんものハ聞伝へ、ちかくハよつてみゝにきく、談洲楼の美満寿連、花咲爺の花も実も、夫ハさくらんぼう、我ハ花子房、いつもなかよき

たつの初春
めでたき日　（二オ）

水魚亭魯石述之

落噺六儀序

談洲楼焉馬述

むかし〳〵一トむかし、天明六年午の四月、釈伽の産れて四日めに、牛嵩なるむさしやにおゐて、落咄の会が権三りますと、巴人亭の筆にみしらせ、三百の落咄ハ四百余洲の君子もいまだまなびす。かの隆国の宇治の茶店も此つとひにハおとるべしと見ゆ。その頃、狂歌盛なりといへども、かゝるおこのゑせ会ハ、天地開はじめしよりためしなく、こん〳〵とん〳〵として一つの物生り。かたち（二ウ）芦の筏のうえに洗鯉をのせ、名づけて四方の赤良、朱楽菅江の二タ柱をおしたて、おのれ、のみてうなごんすみかね棟梁して、片そぎの行合の間より、しもがゝりの咄をおくり、ゆきすぎの噺ハ無恙穴をさがす。今寛政七卯年、落咄の大学を談洲楼に催し、吾家楽のかな盤の銘に曰、苟に日〻に新なるはなしをあつめ、もふけのむしろをひらき、滑稽にあそぶ。こつけいハ酒の器物也。口より出て章をなす。こつけいの酒を吐がごとしとかや。（三オ）口に出るといふ文字にすがり、咄の種をまきそめ、誹諧歌とも狂歌とも一つ畑の友とち、畔もへだてぬ中の郷、多田のやく師の楼上、また虚空に流行て雲のごとく集る。両ごく橋のほとり京屋何某がもとにおいて、はなしのよふな咄の会ハのどづゝの往来かまびすしく、おとがひのかけがねをはづし、門前に市もさかへん。されバ和歌に六儀あり、馬鹿に律儀者あり、八重垣のかいまみに歌道の六義をのぞけハ、風賦比興雅頌といへり。まづ、（三ウ）

風ハ　そへ哥なり。風ハその色ミへず、その品物によせ合せてあらハるゝ也。八雲御抄に云十躰の内、誹諧に類す。あらハにきこへず、外のものにすがりて狂じたるなり。はなしにとつてハゆきすぎばなし

○雷神門　万羅作

〻風神雷神、賽銭にもならず、たまさか紙をふき付られる斗り。なんぞ商ひをはじめよふとおもひつき、まんざらしつけぬこともできまひから、風の神ハ五日め〳〵に風をうろうから、かみなりハ十日め〳〵に（四オ）雨をうりやれ。こひつハよかろふと売出すと大きにうれだし、雨乞のときなどハ五両三両と、ひとくちにいなかへかつてゆき、若殿さまのたこをおあげなさるに、きうに風が一チ両二歩うれるやら。こひつハおつなことだとおもふ所へまた、風を百両、あめを百両、あわせて二百両。まづ百両かねをおひて

行ますから、雨も風も車ではやくよこしてくださひ。跡がね百両ハうちで払いませうといへバ、雷もかぜの神も大きによろこび、扨も（四ウ）すさまじひ仕込てござります。シテ、おまへのおやどもとハどこでござります。わしが所ハ伊勢町

○七両二歩

竹里作

へある所の亭主、となりへきていふやう、なんでもおらがかゝアめハ、まおとこをしています。つけあてゝ四つにしてやるとせいていふゆへ、となりの夫婦、それハマアめつたにせかぬがよい。きつと見すまして、切ともつくとも存ぶんにしたがよいとなだめ、それよりていしゆ、いつものごとく朝（五オ）よりいでゝ、となりにしのんでやうすを見る。密夫のきたるを見すまして、庭からしのび入り、せうじをあけて見れバ、まくら屏風のそとに金八両ならべてあり。是をミるとていしゆ、跡じさりにそろ〳〵とつて帰る。隣りにハ、めつたな事でもできなひけれバよひがと、あんじる所へ、かのていしゆ、すご〳〵帰るをミて、となりの夫婦、とふした〳〵。見とゞけたかといへハ、かの亭主、これおかみさん。ちよつと二歩かしな（五ウ）

○七段目

巴人亭作

へあたりながめて由良之介、つりどふろうのあかりをてらし、読ながぶミハ御台より、かたきのやうすこま〴〵と、女の文のあとや先、与所の恋よとうら山しく、おかるハうへよりのべかゝみ、出してうつしてよみとる文章、下タやよりハ九太夫が、月かげにすかしよむうち、おかるがかんざしぱつたり落て、それからじやらつき出し、おかるうけだそふ。イエ〳〵わたしにハ。ハテ、まぶがあるならそハ（六オ）してやろふ。金わたしてくる間、どつちへもいきやるな。コリヤ女房じやぞ。ソレモたつた三日。それがつてん。ア、かたじけのふごさんす。チャンと、めりやすになつてはいる。おかるひとりいる所へ平右衛門出て、そこにいるハおかるじやないか。兄さん、恥しいところであいましたと、是からいろ〳〵あつて、おかるに切つける。おかる、ぎやうてんする。平右衛門、親おつとのさいごをかたる。おかるハしじうせき上ケ〳〵、なんのいきておりませう。さらバてござんす、兄さんと（六ウ）いゝつゝ刀とりあぐる。やれ、まてしばしと、ゆらの介たち出、夫かん平、連判の数にハ入たれども、未来で主君にいゝわけあるまじ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com